

論文

貨幣および国際価値をめぐる リカードウ、シーニア、J. S. ミル¹⁾

田淵 太一[†]

要旨

本稿は、D. リカードウ、N. シーニア、J. S. ミルを中心に1920年代に至るまでの貨幣と国際価値をめぐる理論史を概観する。

リカードウの貿易論は要素交易条件を重視していた。リカードウは「異なる国々における貨幣価値の相違」を分析し、機械の導入による労働生産性の改善が貴金属の流入を通じて貨幣所得の上昇をもたらす過程を捉えようとした。

リカードウの観点を継承したのがシーニアであった。シーニアは世界市場における競争を通じて輸出産業の労働生産性（貨幣稼得能力）が向上し高い貨幣所得が実現されることを示した。

これにたいして、国際価値論において生産費価値説を放棄し需要供給価値説に転回したJ. S. ミルは、貨幣の分析にも相互需要説を適用した。J. S. ミルは、価値と費用の二分法にもとづき、労働生産性の変化は貨幣の取得費用に影響を及ぼすだけで、貨幣の価値には影響を及ぼさないと誤って結論づけた。J. S. ミル以後、要素交易条件を重視する貨幣と国際価値の分析の流れは見失われることになった。

I. はじめに

本稿は、近年急展開したリカードウ貿易論研究によってもたらされた知見²⁾を手がかりとして、D. リカードウ、N. シーニア、J. S. ミルを中心に、1920年代に至るまでの貨幣価値と国際価値論をめぐる理論史を批判的に概観する³⁾。

†同志社大学商学部教授

1) 本稿は、2023年6月2日にESHET (the European Society for the History of Economic Thought) ベルギー・リエージュ大会において報告した論文 (Tabuchi 2023) の内容を再構成して利用している。

2) Senga *et al.* eds. (2017) および Tabuchi and Hisamatsu (2022) を参照せよ。

3) 1930年代には、機会費用価値説を主張したハーバラーが実質費用価値説を継承したヴァイナーと論争を行うなかで、伝統的理論とは異質の新古典派貿易論を誕生させた (Haberler [1930] 1985; Viner [1937] 1955)。1930年代の論争と新古典派貿易論誕生の経緯については、田淵 (2006, 第5章) ならびに Tabuchi (2017a) を参照のこと。

近年に展開されたリカードウ貿易論研究においては、リカードウが『経済学および課税の原理』（以下、『原理』と略称）などで展開した貿易論が現代のテキストブックに記載される貿易モデルとは異質の理論であることが主張された。J. S. ミル以来の伝統的な理解からリカードウの貿易論を解放することが試みられてきたのである。しかしこれらの議論は、一部を除けば、狭義の貿易論（実物タームでの議論）に集中していた。

今日の課題は、本来のリカードウ貿易論に含まれているはずの貨幣をめぐる議論をも J. S. ミル以来の伝統的な理解から解放することにある。J. S. ミルが国際価値論において行った生産費価値説から需要供給価値説への転回は、狭義の貿易論の枠組みを歪めたばかりでなく、「異なる国々における貨幣価値の差異」というリカードウが提起した重要な議論をも歪めることになったのである。

以下では、第Ⅱ節でリカードウ貿易論に内在する隠された主題、すなわち要素交易条件を重視する観点を摘出し、第Ⅲ節でこのリカードウの主題を継承し発展させたシーニアの意義を明らかにする。さらに第Ⅳ節で J. S. ミルによる価値論の転回が貨幣と国際価値をめぐる議論にどのような影響を及ぼしたのかを探ることにしよう。

Ⅱ. リカードウにおける貨幣と国際価値

1. リカードウ貿易論研究の急展開

リカードウ貿易論研究は、今世紀に入って国内外で急進展を遂げた。R. ラフィンが「4つの数字」にかんする新解釈を発表した（Ruffin 2002）ことを契機として、その後、G. ファツカレロによって「4つの数字」の部分のみに注目する狭い視野が批判され（Faccarello [2015] 2017）、J. S. ミルによる需要供給価値説への転回（塩沢 2014ほか）、貿易前を想定する「事前的視点」（Faccarello 2022）といった棄却すべき対象が明らかにされたことにより、リカードウ貿易論の原像が浮き彫りとなってきた。ここでは本稿の論旨の展開に必要な範囲で近年の研究史を振り返ろう⁴⁾。

ラフィン（Ruffin 2002）が批判対象としたのは、リカードウが『原理』第7章で用いた「4つの魔法の数字」（Samuelson 1969）が、2国2財モデルにおいて各財1単位の生産に必要な労働量（労働投入係数）を示すものとする標準的解釈であった。貿易論ならびに国際経済学の事実上すべてのテキストブックに記載されるいわゆる「リカード・モデル」において、労働投入係数の比が両国それぞれにおいてアウトルキー価格を表わすとされる。貿易開始後、（片方の国が「大国」である場合を除いて）両国は比較優位をもつ財の生産に完全特化するという結果が生じる。このモデルでは、交易条件は相対供給と相対需要により両国のアウトルキー価格

4) 最新のサーヴェイについては、田淵（2022b）、および竹永・田淵・若松（2023、第3節）を参照。

の間で決定され、完全特化のケースでは両国に貿易利益が発生する。

ラフィン「4つの数字」が労働投入係数を示すとするこの標準的解釈を否定し、「4つの数字」の真の意味が「現実に交易されている特定量の財に必要な労働量」であることを示した。そこでは「4つの数字」のうち2つの数字どうしの引き算によって「18世紀ルール」⁵⁾と同様、「労働の節約」という貿易利益が算出される。ラフィンによれば、スラッファ (Sraffa 1930) もまたこうした理解を示唆していた。A. マネスキはラフィンの新解釈を支持し、この新解釈を「スラッファ＝ラフィン解釈」と命名した (Maneschi 2004)。この新解釈に伴い、標準的解釈への合理的再構成を行った責任は J. S. ミル (Mill [1844] 1967, [1848-71] 1965) にあると主張された。この新解釈がもたらした衝撃は大きく、これに触発された多くの研究が生みだされた。

しかし日本では、行沢健三がほぼ同様の理解を約30年も先行して提示していた (行沢 1974, 1978)。行沢もまた、標準的解釈をミル父子以来行なわれた「変型理解」であるとして批判し、リカードウ自身の論理に従った解釈として「原型理解」を提起した (吉信 1991, 田淵 2006, 第3章, Tabuchi 2017b, 田淵・久松 2018)⁶⁾。

これにたいして G. ファッカレロ (Faccarello [2015] 2017) は、ラフィンたちの議論の対象が『原理』第7章のわずか15%を占めるにすぎない「4つの数字」前後の部分に限定されているうえに、実物タームのみに着目する伝統的解釈に囚われていることを批判し、リカードウ貿易論の再解釈をさらに進めて、第7章後半の貨幣にかんする議論や『原理』全体、さらにはリカードウの他の諸著作をも視野に入れた注目すべき読解を示した。ファッカレロによれば、リカードウにとって国内取引と国際取引のあいだに重要な差異はなく、すべての交易はマイクロ主体による個別の貨幣的交換である。価格は輸出国の自然価格に落ち着く傾向がある。貿易利益は「意図せざる結果」にすぎず「比較優位の原理」は貿易パターンを説明できない。リカードウは、攪乱的なショックが貴金属 (貨幣) の分配の変化を通じて各国における貨幣価値の相違をもたらし、それが自然価格を変化させ、それによってさらに貿易フローが変化するという連続的なプロセスの分析を重視した、とする。

さらにファッカレロは、J. S. ミルでなく J. ミルこそがリカードウの「事後的アプローチ (ex

5) 「18世紀ルール」は、J. ヴァイナーによって次のように定義された。「諸商品が自国内で生産するより少ない実質費用で、輸出品と交換に入手されうる場合には、それらを海外から輸入する」 (Viner 1937: 440) ヴァイナーが言及した「18世紀ルール」を提示した冊子の著者は長らく不明だったが、今日ではヘンリー・マーティンと確定している (Martyn 1701)。ラフィンは (後述する行沢も) リカードウ『原理』第7章の「4つの数字」の設例も貿易利益については「18世紀ルール」と同様の理解を示していることを明らかにした。

6) C. ゲールケは、行沢のみならず Parrinello (1988) もまたラフィンによる新解釈の先行者であるとして、「4つの数字」にかんする新解釈を「スラッファ＝行沢＝パリーネロ＝ラフィン解釈」 (the “Sraffa-Yukizawa-Parrinello-Ruffin interpretation”) と呼称することを提唱した (Gehrke 2023: 3)

-post approach)」から「貿易前」(アウトルキー状況)を想定する「事前的視点(ex-ante perspective)」へと分析視点を転換したことを明らかにした(Faccarello 2022)。「4つの数字」が労働投入係数に置き換えられたのはその結果にすぎないとされる。

この分析視点の転換は重要な意味をもつ。〈貿易前—貿易開始後〉を想定する「事前的視点」にもとづき、アウトルキー状況における与件(労働投入係数・生産要素の存在量・相互需要)から貿易状況を構成する分析構図をつくり出したミル父子と異なり、『原理』におけるリカードウの貿易にかんする叙述は時間因果から離れることはない。リカードウは貿易を閉鎖経済から開放経済への移行という1回限りの変化でなく、時間因果を離れずに「つねに継続する」(*Works I* : 343)⁷⁾過程として捉えていた。租税や貿易政策といった攪乱要因が貴金属の分配の変更をもたらし、それによって各国の貨幣価値が変化することを通じて自然価格が変化し、その変化がさらに貿易フローを変化させるという時間因果のなかでの一連の過程を分析することに、リカードウ貿易論の特質があったと言える(この議論の詳細については、田淵 2022bを参照)。

ファッカレロが指摘したように、リカードウは外国貿易においても価格を規制するのは自然価格(貨幣表示の生産費)であると論じていた(*Works I* : 375など)のであるから、J. S. ミルが相互需要説(貿易論における需要供給価値説)を考案する際に意識していた「交易条件の不確定性」問題はリカードウには最初から存在しなかったことになる(Tabuchi 2018)。

それでは、なぜJ. S. ミルは生産費価値説から需要供給価値説への価値論の転回に追い込まれたのだろうか? この問いにたいして、J. S. ミルの理論構造にもとづいて回答を与えたのが、塩沢由典の「新しい国際価値論」(塩沢 2014, Shiozawa 2017a, 2017b)である。塩沢は多数国多数財・投入財貿易・技術選択を分析する貿易理論として「新しい国際価値論」を提起したが、その成果にもとづいて、J. S. ミルが相互需要説を導入する際に2国2財の完全特化ケースに自らの分析を限定したことによって価値論の転回に追い込まれたことを明らかにした(Shiozawa 2017b)。塩沢はこのJ. S. ミルの転回がのちの新古典派による需要供給価値説の全面化に道を開いたとする。

2. 「ラフィン解釈」再考

ラフィンによる新解釈(Ruffin 2002)をひとつの契機として、こうして堰を切ったようにリカードウ貿易論を捉え直す諸研究が登場した。しかしながら、ラフィンとマネスキたちはその後も「4つの数字」の真の意味を明らかにしたことをもってリカードウ貿易論の特質を把握しきれたと誤解しており、生産費価値説・多数国多数財の枠組・貨幣への着目といった新たに切り拓かれつつある地平には踏み出していない。彼らは、これまで主流派貿易論を支えてきた二

7) リカードの著作からの引用・参照はRicardo (1951-1973)から行い、*Works volume* : page (原著ページのみ)と表記する。

本柱である「比較優位の原理」および「相互需要説」（需要供給価値説）にたいして疑問を抱かず、リカードウはテキストブックと同じ原理をテキストブックとは異なる提示法で示したただけであって、両者のあいだに互換性があると捉えている（Maneschi 2004; 2008）。たとえば、マネスキはラフィンの新解釈をもとに「4つの数字」を労働投入係数表示に転換した設例を作成し、それを根拠にリカードウの論理がテキストブックで説明される「比較優位の原理」と本質的に同等のものであると主張している（Maneschi 2004: 436）。

こうした認識ギャップの背後には、支配的パラダイムへの忠誠といったイデオロギー的要素ばかりでなく、彼らが理論的にリカードウ貿易論の特質を捉え損ねている要因もあるのではないか。

上述したように、ラフィンによる新解釈で否定されるのは、「4つの数字」が各財1単位の生産に必要な労働量（労働投入係数）であるという従来の解釈である。そこからマネスキに見られるように、「4つの数字」を労働投入係数表示に改めればリカードウの論理がテキストブックのモデルに還元できるかのような誤解が生じている。しかしながら、ファッカレロ（Faccarello 2022）が的確に指摘したように、ミル父子以降の標準的解釈とリカードウの論理との根本的な相違は分析視角の違いにあるのであって、リカードウが現実に行われた貿易を分析する「事後的アプローチ」を採用していたのにたいし、ミル父子が〈貿易前—貿易後〉という思考回路に従う「事前的視点」に転換したことが決定的に重要である。「4つの数字」が労働投入係数として表示されるようになったのはたんに表面的な相違にすぎない。逆に、「事後的アプローチ」で労働投入係数を用いることも可能である。ラフィンが「4つの数字」の真の意味であるとした「現実には交易されている特定量の財に必要な労働量」において、「特定量」を再び1単位と定義し直して、「交易条件 = 1 : 1」を所与として議論しても、リカードウの論理になんら反しないのである。

3. 「靴屋と帽子屋」の設例の「事後的アプローチ」にもとづく解釈⁸⁾

『原理』第7章で「4つの数字」を論じた部分に付された長い脚注の後半でリカードウが示した設例は、長いあいだ不可解なものとされてきた。

2人の人間がいて、ともに靴も帽子も作れる。一方が両方の仕事で他方に優るとする。ただし一方の人が帽子製造で競争者に優る度合いがわずかに5分の1すなわち20%であるのにたいし、靴製造のほうでは3分の1すなわち33%優っているとしよう。優れたほうは靴製造

8) 以下の説明は2023年5月20日に開催された経済学史学会・専修大学大会におけるセッション報告「リカードウ研究の現段階」のうち筆者担当の報告「リカードウの外国貿易論」において、予定討論者・鳴瀬成洋氏にたいして筆者が行った回答をもとにしている。この場を借りて鳴瀬氏に建設的な討論にたいする謝意を表したい。

に専従し、劣るほうは帽子製造に専従するのが、両者の利益ではないか？（*Works I* : 136）。

リカードウによるこの設例には明らかな矛盾点がある。直前の本文で「このような交換は同一国内の個人間では起こりえないであろう」（*Works I* : 135）と述べていることと整合しないのは明らかである。さらに、同一国内の個人間であるにもかかわらず、2人のあいだには労働生産性に差がある。ここでは暗黙のうちに同一国内に「異質の労働」（あるいは熟練度に差がある労働）が存在することが想定されている。同一国内の2人の個人が、あたかも、互いに労働が移動しない2国のように扱われているのである。したがって、2人のあいだには同一国内にもかかわらず「賃金格差」が生じる（この点は後で数値例を用いて説明する）。以下で行う議論ではこうした矛盾をはらむ想定をそのまま受け入れ、リカードウのテキストに含まれるより本質的な論理の一貫性を明らかにしよう。

この脚注は長らく、「4つの数字」にかんする標準的解釈（行沢の言う「変型理解」）の主要な源泉となってきた（リカードウの設例に倣い、サミュエルソンは『経済学』のなかで「弁護士とタイピスト」という設例を用い、日本のあるテキストブックでは「アインシュタインと弟子」という変種も用いられた）。2人の個人と2種類の仕事は2国2財に類比され、あたかも「4つの数字」が一括で提示され、〈貿易前—貿易後〉という「事前的視点」の思考回路を正当化するものであるかのように解釈されてきた。

この脚注は、リカードウ貿易論を行沢の言う「原型理解」にもとづいて一貫して解釈しようとする際に難問として立ちはだかる。たとえば、行沢「原型理解」の継承・発展に尽力した吉信は、この脚注にたいして、「リカードウ自身が与えているこの類推は、彼の本文における推論に対して適切なものであるか」と疑問を呈している（吉信 1991 : 81）⁹⁾。「4つの数字」にかんする新解釈を提起しながら、結局のところ標準的解釈における「比較優位の原理」を受容し礼讃するラフィンは、この部分を引用して「驚嘆すべき脚注」（the tremendous footnote）であると賞賛している（Ruffin 2002 : 740）。

しかしながら、この設例を「事後的アプローチ」にもとづいて解釈することは可能である。

リカードウの原文にもとづいて、表1のような数値例を設定してみよう。

テキストブックにあるとおり、この交易を「事前的視点」から分析するならば、まず2人の個人がアウトルキー状況におかれる貿易前を想定し、次に貿易開始後、貿易パターンと交易条件が決定されるという手順が踏まれるだろう。貿易開始後、「比較優位の原理」に従って、個人Aは靴の製造に、個人Bは帽子の製造に特化し、交易条件 p_s / p_h は、2人の個人の機会費

9) 鳴瀬氏は先述の討論のなかで、この脚注について、「4つの数字」の比較にもとづいているという点で内容は「変型理解」であるが、リカードウが確信をもって述べているという点で「もう一つの原型」と呼ぶべきものであるとする卓抜な表現を与えた。

表1 リカードウ『原理』第7章脚注における「靴屋と帽子屋」の設例

	労働投入係数 (時間)		機会費用
	靴	帽子	
個人 A	15	16	15/16 = 0.94
個人 B	20	19.2	20/19.2 = 1.04
A の優位性	33%	20%	

用のあいだで変化することになる。

$$0.94 = 15 / 16 < p_s / p_h < 20 / 19.2 = 1.04 \quad (1)$$

ここに J. S. ミルがこだわった「交易条件の不確定性」(Schumpeter [1954] 1994 : 608) の問題が現れる。交易条件を決定し、それがどのように変化するかを説明するためには、J. S. ミルが行ったように、「相互需要」と「需要の弾力性」にもとづく国際価値論を補完的に導入する必要がある。

両者の賃金格差 w/w^* は、「相互需要」と「需要の弾力性」の変化によって、次のような範囲で変化する。

$$1.2 = 19.2 / 16 < w/w^* < 20 / 15 = 1.33 \quad (2)$$

つまり、「相互需要」と「需要の弾力性」にしたがって、個人 A の賃金水準は個人 B の賃金水準より 20~33% 高くなる。

以上の説明が「事前的視点」にもとづく標準的な解釈である。

しかしながら、この設例で「事後的アプローチ」を採用することも可能である。表 1 の例がすでに行われている交易を描いており、貿易パターンと交易条件はともに所与であると想定しよう。個人 A はすでに靴作りに、個人 B は帽子作りに特化しているので、2 人は最初から「靴屋」と「帽子屋」としてこの設例に登場している (スミスが『国富論』第 4 編第 2 章で用いた「仕立屋と靴屋」の設例と同様である)。

いま、交易条件 p_s/p_h が次のように与えられたとしよう。

$$p_s/p_h = 1 \quad (3)$$

この場合、交易条件は両者の生産費 (両者の労働投入係数 15 と 19.2 にそれぞれ両者の賃金 w と w^* を乗じたもの) によって規定され、需要によって変化することはない。

$$15 w / 19.2 w^* = 1 \quad (4)$$

したがって、両者の賃金格差 w/w^* は、生産費にもとづいて次のように確定する。

$$w/w^* = 19.2/15 = 1.28 \quad (5)$$

すなわち、個人 A の賃金水準は個人 B の賃金水準より28%高い。

これが「事後的アプローチ」にもとづく新解釈である¹⁰⁾。

リカードウのテキストが明確さを欠くため、いずれの解釈も成り立つ余地がある。しかしながら、リカードウのテキストにある不整合を論うのでなければ、本文だけでなく脚注の解釈においても「事後的アプローチ」を一貫して採用するのが適切な読解であると言えるのではないだろうか¹¹⁾。

4. リカードウにおける貨幣価値と貨幣所得

(5) 式に端的に示されているように、「事後的アプローチ」にもとづいて、要素交易条件 (19.2 : 15) と賃金格差 (w/w^*) の基本的な関係が明確に理解できることは注目に値する。リカードウの理論は、本質的に、J. S. ミルが探求した商品交易条件よりも、要素交易条件を重視していたことがわかる。リカードウが国際貿易にかんする議論に貨幣を再導入¹²⁾ した『原理』

10) 「事後的アプローチ」にもとづくこの読解は、2023年6月のESHET年次大会においてC. ゲルケの賛意を得た。

11) リカードウが『原理』第28章で提示している次の数値例は、輸入禁止とその解除を対比して論じる場合でさえ、リカードウはJ. S. ミルと異なり、「事前的視点」を採用せず、また国際価格が相互需要の影響を受けて変化するとも考えていなかったことを示していると言ってよいであろう。「もしも穀物の輸入がイングランドで禁止されるならば、その自然価格はイングランドで1クォータにつき6ポンドに騰貴するかもしれないが、それにたいしてフランスではその半値にすぎないということになる。もしもこのときに輸入の禁止が解除されるならば、穀物は、イングランド市場において、6ポンドと3ポンドの中間の価格にではなくて、究極的かつ永続的には、フランスの自然価格、すなわち、穀物をイングランド市場に供給し、そしてフランスでの資本の普通かつ通常の利潤を与えるる価格に、下落するであろう、そしてそれは、イングランドが10万クォータを消費しようと、あるいは100万クォータを消費しようと、この価格のまま続くであろう」(Works I : 374-375)。

12) ファッカレッコ ([2015] 2017) が的確に指摘しているように、リカードウは『原理』全体を通じて、国内交換においても国際交換においても、すべての取引が独立した貨幣的なものであると考えている(「商業上のあらゆる取引は独立の取引である」Works I : 138)。第1章から第6章まで、彼は貨幣の存在を前提としているが、「貨幣の価値を不変とみなす」(Works I : 110, 46も参照)。第7章の後半(「金と銀が流通の一般的媒介物として選ばれ……」以下 Works I : 137ff) では、貨幣の価値の変化に関する分析に着手する。その直前の、第7章の15%に相当する「4つの数字」にかんする部分(「一国における諸商品の相対価値を規制するのと同じルールが……」以下 Works I : 133ff) のみ、

第7章「外国貿易について」の後半を理解するためには、隠された主題を明らかにする必要がある。リカードウはそこで、「世界各国における貨幣の比較価値」(Works I : 145) にかんする考察を展開している。

貨幣の価値は、現にそうであるように相対的な課税、製造上の熟練、気候、自然の産物、その他多くの原因にもとづく利点によって依存しているのであるから、どの2国においてもけっして同一ではない。(Works I : 143)

リカードウは、他のすべての商品と同様に、金の価値を生産費価値説にもとづいて説明している。

金および銀は、他のすべての商品と同様に、それを生産して**市場にもたらす**のに必要な労働量に比例する価値をもつにすぎない。(Works I : 352, 強調引用者)

ここでリカードウは、金を含むすべての商品の生産費を、「それを生産するのに必要な労働の量」(直接生産費)と「市場に出す」のに必要な労働の量(間接生産費)の2種類に区別している。

一方では、金は一種の商品として輸出または輸入され、他方では、流出入する金は貨幣として使用される。貿易収支を回復するための各国経済の一般的な調整は、一方の国の貨幣の増加と他方の国の貨幣の減少によって引き起こされ、その結果、自然価格の変動を通じて、「異なった国々における[貨幣]価値の差異」(Works I : 142)をもたらす。

ここで、「4つの数字」(若干の修正を行った)と貿易財の自然価格の数値例を設定してみよう(表2)。

単純化のために、金1オンス=45ポンドと仮定する。「事後的アプローチ」では、上述の「靴

表2 リカードウ『原理』第7章「4つの数字」(修正)・自然価格・貨幣価値

	労働投入係数 (人/年)			貨幣稼得能力 (労働1単位で獲得できる金量, オンス)	自然価格 (金1オンス = 45ポンド)	
	ワイン	クロス	金1オンス		ワイン	クロス
ポルトガル	81	90	81	1/81	45ポンド	50ポンド
イングランド	120	108	108	1/108	50ポンド	45ポンド

貨幣の存在を想定しない実物タームでの議論とみなすことができる。

屋と帽子屋」の設例で示したように、現実に行われている貿易において、交易条件 = 1 : 1 を所与とすれば、「現実取引されている特定量のワインとクロスを生産するのに必要な労働量」を「労働投入係数」に転換することができる。

ここで、ワインとクロスの労働投入係数は「直接生産コスト」であり、金の労働投入係数は「間接生産コスト」であろう。前者の逆数は商品を生産するための労働生産性を意味し、後者の逆数は「金（または貴金属）を稼得する能力」を意味する。

ワインとクロスの自然価格 p_w と p_c は次のように示される：

$$p_w = a_w w (1 + r) \quad (6)$$

$$p_c = a_c^* w^* (1 + r^*) \quad (7)$$

ここで、 a_w と a_c^* はポルトガルのワインとイングランドのクロスの労働投入係数、 w と w^* はそれぞれポルトガルとイングランドの一般的貨幣賃金率、 r と r^* はそれぞれの国の一般利潤率である。したがって、次のように表せる。

$$w (1 + r) = p_w / a_w \quad (8)$$

$$w^* (1 + r^*) = p_c / a_c^* \quad (9)$$

表2の数字を代入すれば次のようになる。

$$w (1 + r) = 45 / 81 (\text{£/men}) \quad (10)$$

$$w^* (1 + r^*) = 45 / 108 (\text{£/men}) \quad (11)$$

(10) と (11) は、ポルトガルとイングランドにおける「貨幣所得」の水準を示しており¹³⁾、それぞれの国における輸出商品の労働生産性（それぞれ 1/81 と 1/108）によって決定される。

このように、自然価格、貨幣価値（すなわち、貨幣の生産費）、「貴金属稼得能力」、貨幣所得の水準という「4つの数字」の間には、単純明快な関係があることが理解できる。ここで、「異なった国々における貨幣価値の差異」（*Works I* : 142）と貿易を行う国々における貨幣所得の水準を規定するのは、要素交易条件（108人 : 81人）であることが理解できる。

13) 賃金と利潤率にかんして、リカードウは、製造業が繁栄しているところでは貨幣賃金は上昇する傾向があるが、利潤率はほとんど上昇しないことを観察している。「利潤率はおそらくほとんど異ならないであろう。というのは、賃金、すなわち労働者に対する実質的報酬は、両国において同じであろうからである」（*Works I* : 142）。リカードウの推論においてつねにそうであるように、ここでも実質賃金は一定であると仮定されている。

第7章では、リカードウはおもに輸入代替部門（つまりイングランドのワイン）で労働生産性が上昇する場合を説明しているが、上記の理解は、以下のリカードウの叙述と一致するだろう¹⁴⁾。

貨幣は両国においてある程度その価値が変化するであろう。それはイングランドでは引き下げられポルトガルでは引き上げられるであろう。貨幣で評価されるならば、ポルトガルの全収入は減少し、同じ媒介物で評価されるならば、イングランドの全収入は増加しているであろう。(Works I : 141, 強調引用者)

リカードウは『マルサス評注』において、国によって貨幣価値が異なる3つの要因を挙げている。

金や銀は、国を異にすれば、とくに金や銀の価値が金や銀によって支配される穀物や労働の量によって測られるなら、きわめて異なった価値をもつであろうことを、私はもっともはっきり認めるものである。じっさい私はこの相違が三つの原因によるものであることを示そうと努めてきた。第一は、金や銀を高める商品で購入する場合にこれにともなうかかる経費、これは金や銀が売られる市場までこれらの商品を運ぶのにもなう経費がかかるためである。第二は、航海の距離のために、この経費はさらにいっそう引き上げられる。第三は、土地の肥沃度に比例する資本の不等の蓄積による、異なった国における異なった利潤率。もし労働が、ヨークシャでは、グロスタシャにおけるよりも、はるかに高ければ、利潤はより低く、資本は次第に前者の場所から後者の場所へ移されるであろう。このために、それぞれの地方は、一般的資本のうちその地方がもっとも有効に投下しうる部分をもつことになるであろう。——独立の国々のあいだではそうはならない。資本は、労働がポーランドでより安いからというだけで、イギリスからポーランドへ移動はせず、この理由のために、金は、あるところでは労働に比べて価値が低く、他のところでは高いであろう。(Works II : 86-87)

第一および第二の原因は、輸送費の問題である。リカードウは、この問題が非貿易財や嵩の高い商品の存在によるものと見ている。

このことは異なった国々における貨幣価値の差異をある程度説明するであろう。それは、**国産商品の価格、および価値は比較的小さいが嵩の高い商品の価格が、他の諸原因とは無関係に、なぜ製造業が繁栄している国々でより高いのかを説明するであろう。まさに同数の人口と、相等しい肥沃度の同量の耕作地をもち、さらに同じ農業知識をもつ2国のうち、より**

14) 小島 (1952, 第4章) は、リカードウが分析した貨幣的調整過程を数値例を用いて説明している。小島もまたリカードウ貿易論における要素交易条件の重要性を強調していた。

すぐれた熟練とよりよい機械が**輸出商品の製造**に用いられているほうの国において、原生産物の価格はもっとも高いであろう。(Works I : 142, 強調引用者)

原生産物ばかりでなくそれらの賃金も、彼らの熟練と機械にともなう利点のために多量の貨幣が彼らの財貨と引き換えに輸入される国では、貨幣での評価はより高いであろう。(Works I : 142)

一方、第三の要因(「国によって異なる利潤率」とは、国によって資本の蓄積が不均等であり、肥沃な土地の耕作によって賃金や利潤率が高くなったり低くなったりすることを指す。リカードウの理論は、「利潤率は賃金の低下による以外にはけっして増大しえない、そして賃金の永続的低下は、賃金が支出される必需品の下落の結果として以外には起こりえない」(Works I : 132)¹⁵⁾という命題に結びついているため、彼は、要素交易条件と貨幣所得の水準との関係をストレートには説明できなかつた。そのかわりに彼は、貴金属の流出入によって、一般物価とともに貨幣所得が上昇または低下すると説明した。

リカードウは『マルサス評注』を執筆した時点では、要素交易条件を過小評価しているように見える。

アメリカにとっては、自国の商品の返礼として獲得する商品が、ヨーロッパ人に労働を多く費やさせているか少なく費やさせているかは、どうでもよいことである。アメリカが利害関係をもつのは、この商品を自国で製造するよりも購買するほうがアメリカにとりよりわずかの労働しか費やさせないということにつきるのだ。(Works II : 383)¹⁶⁾

しかしながら、リカードウは『原理』第3版に追加した第31章「機械について」の最後の段落で、要素交易条件の重要性を全面的に認めている。

商品の価格は、その生産費によって左右される。改良された機械を使用することによって、

15) しかし、たとえば1821年3月23日付のマカロック宛手紙においてリカードウはこう述べている。「こういう国では、穀物法はあっても利潤は隣国よりも高く、したがってその国が安い穀物の輸入を拒んでも資本はすこしもその国から流出しないでしょ」(Works VIII : 358)。この手紙は『原理』初版の出版後、リカードウがいわゆる「比較優位の原理」を再論したほとんど唯一の例として知られているものだが、そのなかでリカードウはマカロックに単純化された教義を政策問題に直接適用しないように求めている。いわゆる「リカードウの悪弊(‘Ricardian vice’)」(Schumpeter [1954] 1994 : 473)の論議はリカードウ自身よりもリカードウ派にたいしてより当てはまると思われる。

16) この引用文の後半は先述した貿易利益にかんする「18世紀ルール」を示している。注5を参照。

商品の生産費は引き下げられる、その結果として、われわれはそれを外国市場でより低廉な価格で販売することができる。しかしながら、他のすべての国が機械の使用を奨励しているのに、われわれがこれを拒否するようなことがあれば、われわれは、わが国の財貨の自然価格を他の諸国の価格にまで下げるまでは、外国財貨と引き換えにわが貨幣を輸出することを余儀なくされるであろう。それらの国々と交換をするにあたって、われわれは、この国で2日の労働を要した商品を、海外で1日の労働を要した商品にたいして与えることになるかもしれない、そしてこの不利な交換はわれわれ自身の行為の結果であろう、というのは、われわれが輸出し、そしてわれわれに2日の労働を費やさせた商品は、もしもわれわれが機械の使用を拒否しなかったとすれば、われわれにわずかに1日の労働を費やさせたにすぎないだろうからである、これにたいして、われわれの隣国人はより賢明に機械の用役を専有したのである。(Works I : 397, 強調引用者)

Ⅲ. シーニア『貨幣稼得費用にかんする3つの講義』(1830年)における貨幣と国際価値¹⁷⁾

前節では国内外でリカードウ貿易論研究が急進展するなかからリカードウ貿易論の特質が浮き彫りにされてきたことをサーベイした。とりわけ、リカードウは、輸出産業の労働生産性・貨幣の生産費・貨幣稼得能力・貨幣所得のあいだの関連を把握し、貿易がもたらす利益のうち要素交易条件の改善を重視していたことを強調した。

国際価値論と貨幣論において、リカードウ理論のこの特質を継承したのがシーニアであった¹⁸⁾。シーニアは、『貨幣稼得費用にかんする3つの講義』(Senior [1830] 1998)において、次の3つの特徴をもつ貨幣論・国際価値論を展開した。

- 1) シーニアは、抽象的な2国2財のケースを想定するのではなく、現実の世界市場、言い換えれば、貴金属(貨幣)を含む多国多財のケースを分析した。
- 2) シーニアにとって、金を含む商品の国内外での価値を規定するのは生産費であり、需要・供給ではない。
- 3) 貿易から得られる利益についてシーニアは、商品交易条件の改善による静態的な利得よりも、貿易による動態的な利得、すなわち世界市場における競争を通じて輸出産業の労働生産性が向上することによって貨幣賃金・貨幣所得の上昇をもたらすことを重視した。

17) シーニアの国際価値論と貨幣論についての古典的な研究は名和(1949)である。また、本節の論旨のより詳細な議論は、田淵(2020, 2022a)で展開している。

18) 通説的な経済学史においてシーニアはリカードウの継承者とは見られず、むしろ反対者として捉えられることが多い。国際価値論・貨幣論に限定して言えば、シーニアの論争相手であったR.トレنزが相互需要説を主張する際、リカードウの名を僭称してシーニア批判を行った影響が現在まで続いていると言える。たとえば、Robbins(1958)におけるトレنز・シーニア論争の評価がそうである。国際価値をめぐるトレنزとシーニアの論争については、田淵(2020)を参照せよ。

シーニアは、世界市場と世界貨幣を現実的に描写し、とりわけ非産金国における輸出産業の労働が産金国の金生産労働と同等のものであると捉えた。シーニアは、世界市場における貨幣（貴金属）稼得能力こそがその国の一般的な貨幣所得水準を決定すると考えた。

実際、貴金属の可動性と貴金属需要の普遍性によって全商業世界は一国となる。そこでは地金が貨幣であり、各国の住民は別々の階級に属する労働者を形成している。(Senior [1830] 1998 : 14)

産金国ではすべての価格は究極的に貴金属の生産費によって決定される。……世界市場こそがイングランドにとって鉱山として作用する。その輸出によって貴金属を稼得する商品の生産に従事する労働者が鉱山労働者である。労働の骨折れおよび資本の前貸によって稼得される貴金属の量はまさに他のすべての生産者の報酬を計算する尺度を提供するものでなければならぬ。(Senior [1830] 1998 : 15-16, 強調引用者)

シーニアは輸出産業の生産性向上が他の部門も含めた所得の向上をもたらすことを次のような比喩を用いて生き活きと描写している。

[地主の] 世襲財産とされているもののうちその大部分の価値が実は隣人である製造業者の煙突や紡績機械が産みだしたものであるとは思ってもよらないだろう。(Senior [1830] 1998 : 19)

シーニアはある国の輸出産業の生産性こそが世界市場における国民労働のさまざまな等級の階梯のうちでどの位置につくかを決定するものであるということを論じた。シーニアはこの論理にもとづいて、貿易利益を「自国で生産しようとするならば要費するであろうよりも少ない労働で得られる」こと（「18世紀ルール」）ばかりでなく、さらに輸出産業の高生産性によって有利な要素交易条件が実現できることに結びつけた。

わが国は自国産業の価値を驚くべき高さまで引き上げることに成功してきた。わが国は貴金属を世界あるいはもっとも文明化された地域の平均よりはるかに低い費用で稼得している。このことはわが国の産業の卓越した生産性をもたらす大きな優位性の結果であるばかりでなく、他の多くの優位性の原因にもなっている。その優位性のおかげでわが国は、立法府が許可し、また安価という理由で禁止しないかぎり、他国の生産物を得ることができるのだが、それは自国で生産しようとするならば要費するであろうよりも少ない労働で得られるばかりでなく、しばしば生産国で要費するよりも少ない労働で得られるのである。イングランドの

1人の労働者が150オンスの銀の価値がある綿布を生産し、同じ期間に5人のポーランド人が150オンスの銀の価値をもつ穀物しか生産できないとしても、1人のイングランド人が生産した綿布と交換に5人のポーランド人が生産した穀物を引き渡すことがポーランドにとっては有利だということになるのである。(Senior [1830] 1998 : 23, 強調引用者)

生産力が高く、またそれゆえに賃金も高い国が自国民を、文明度の劣る国々の価値の少ない労働によっても有効になされうような仕事に使用するとすれば、それはまさに競走馬を畑の耕作に使用する農業者と同じ愚を犯すものである。(Senior [1830] 1998 : 30)

シーニアは、国々は「世界市場で競争相手となる国々」と同じ重要な商品（たとえば綿製品）を生産し輸出すると想定しており、そこでは、各国におけるその輸出産業の労働生産性が貨幣（貴金属）稼得能力、したがって賃金・所得を決定するのである。

多くの経済学者たちは近隣諸国の生産性改善によって損失を被る国はないと主張してきた。彼らによれば、大陸諸国がイングランドで現在要費する労働の半分で綿製品を製造できるようになったとしても、その結果は、自国で要費するよりも少ない労働で綿布を輸入することができるようになるというだけであり、現在綿布製造に用いられている産業の一部をなにか他の商品を追加的に得ることに転用することができるようになるかもしれない、というのである。こうした見解は寛容さという外見をもっているので異議を唱えるのは申し訳ない。しかし、イングランドと大陸諸国は**世界市場における競争者**であるということを忘れてはならない。このような変化は大陸諸国の**貴金属稼得費用**を減少させ、イングランドのそれを増大させる。**労働の価値**は大陸諸国では上昇し、イングランドでは低下する。その製造で改善の行われなかったすべての商品にたいしても、大陸諸国はより多くの貨幣を要求するようになり、イングランドはより少ない貨幣を要求するようになるだろう。イングランドは綿製品を得ることは容易になるだろうが、他のすべての商品を輸入することはより困難になるであろう。(Senior [1830] 1998 : 25-26)

シーニアは、各国が「世界市場における競争者」として同じ重要商品（たとえば綿布）を生産・輸出する世界経済を想定し、各国の輸出産業の労働生産性が貨幣（貴金属）を稼得する能力を規定し、ひいては貨幣賃金や貨幣所得水準を決定すると捉えた。このシーニアの把握は「機械について」の章の末尾でリカードウが到達した見解と本質的に同じ観点であると見てよい（第Ⅱ節末尾の引用文を参照）。

リカードウとシーニアはともに、国内交換と国際交換のいずれにおいても価値を規制するのは生産費であると主張した。リカードウは『原理』でこう述べた。

私が主張するすべてのことは、諸商品が独占の対象でないかぎり、それらが輸入国で販売される価格を究極的に左右するものは、輸出国でのその**自然価格**である、ということに帰着する。(Works I : 375, 強調引用者)

リカードウは自然価格を「生産費の別名」(Works II : 46), 「[商品の] 自然価格, すなわち貨幣でのその生産費」(Works I : 383) と規定しているので, リカードウは上の引用文で, 国内交換も国際交換も生産費で価値が決定されると考えていたと言ってよい。

シーニアはリカードウの生産費価値説をほぼそのまま受け継いだと考えられている。シーニアは, リカードウの上掲の一文を明らかに意識して, 次のように論じた。

商品の価格が自然的ないし人為的な独占によって影響されないかぎり, それは生産者の**生産費**に一致する……これが国内通商に関して正しいことは明らかである。国際通商にかんしても同様にこれが正しいということもまた明らかであると思われる。(Senior [1843] 1998 : 37, 強調引用者)

国際価格を規定するのは, リカードウにおいては「自然価格」であり, シーニアにおいては「生産費」である。両者の違いはどこにあるのだろうか。

リカードウにとって, 自然価格が「生産費の別名」であることは事実であるが, 同時に彼は, 「その自然価格, すなわち貨幣的**生産費**は, 貨幣価値の変化によって本当に変化してしまう」(Works I : 383) と主張している。

シーニアにおいては, ある国の輸出産業における労働生産性の向上は, その国が世界市場で貴金属を入手する能力を高めることを意味し, それによってその国の貨幣賃金あるいは貨幣所得の水準が上昇することになる。他方, リカードウは, 輸出産業における労働生産性の向上(「擾乱」としての「芸術と機械の改良」)は賃金に直接影響しないが, 貴金属の再分配を通じて貨幣価値を変化させることによって間接的に賃金や物価に影響するとした(Works I : 141ff)。

両者の違いは, 賃金理論の違いに起因している。シーニアが, 賃金基金説に依拠しながらも, 労働生産性の上昇・低下に賃金の上昇・低下がストレートに連動することを説明できた(Senior [1831] 1998; Bowley 1937 : Chaps. 5 & 6) のにたいして, 先述のとおり, リカードウ理論は, 「利潤率は賃金の低下による以外にはけっして増大しえない, そして賃金の永続的低下は, 賃金が支出される必需品の下落の結果として以外には起こりえない」(Works I : 132) という命題に縛られている。だからこそ, リカードウは, 貴金属の再分配を通じた貨幣

価値の変化による自然価格の調整メカニズムに依存せざるを得ず、貨幣賃金や貨幣所得を含む一般物価の上昇・下落という形でしか分析を展開することができなかつたのである¹⁹⁾。

IV. J. S. ミルとその後における貨幣価値と貨幣所得の議論

1. J. S. ミルは貨幣価値をどう把握したか

リカードウが『原理』第7章で述べた一文が国際価値論にとって「躓きの石」となってきた。

1国において商品の相対価値を規定するのと同じルールが、2国あるいはそれ以上の国のあいだで交換される商品の相対価値を規定するわけではない。(Works I :133, 強調引用者)

この「同じルール」を「生産費原理(生産費価値説)」であると捉えたのがJ. S. ミル(およびR. トレンズ)であった(田淵 2020)。J. S. ミルはリカードウ理論には交易条件決定理論が欠如していると解釈してこれを補完するために「国際需要均等」の法則(いわゆる「相互需要説」)を考案した。

価値は生産費に比例するという原理は、こうして適用できなくなるから、われわれは生産費の原理に先行する原理、生産費の原理を結果的にもたらす原理、すなわち需要と供給の原理に立ち返らなければならない(Mill 1844 : 237, 訳 : 218. Mill [1848] 1965, III : 596, 訳(3) : 280も見よ)。

国際価値論におけるJ. S. ミルによるこの需要供給価値説への転回が、後に新古典派経済学による純粋交換経済の全面化に道を拓いた。

しかし、本稿の文脈で重要なのは、J. S. ミルが「国際需要均等」の法則を、国際貿易の分析だけでなく、貨幣価値の分析や貴金属の流通の分析にも適用しようとしたことである(Mill [1848] 1965, III : Chaps. 19 and 21)。

「国際需要均等」の法則は、国際均衡において需要量は供給量とまったく同じでなければならないという論理的前提をもっている。こうしてJ. S. ミルは第18章の最初のページで、リカードウやシーニアと反対に、すべての貿易は実際には物々交換であると述べている²⁰⁾。

19) シーニアはリカードウの賃金論を「[賃金]が高いか低いかは労働者が自分の労働の生産物から受けとる分け前や比率によると定義され、その生産物の総量についてはまったく論じない」と要約したうえで、「リカードウ氏が行った経済学の用語における数々の革新のうちもっとも残念なものである」と批判した(Senior [1831] 1998 : 2-3)。

20) しかしながら、J. S. ミルはこの見解をリカードウに学んだと主張している。彼は「きわめて豊かな

すべて貿易というものは、実際においては物々交換であって、貨幣はもろもろの物品を互いに交換するためのたんなる道具にすぎないものであるから、私たちは、簡単にするために、国際貿易は、その形態において一商品の他の商品にたいする実際の現物交換である（実際においてはそれはいつもこれである）と仮定することによって、はじめよう。これまでのところで、私たちは交易にかんする諸法則は、貨幣が使用されると否とにかかわらず、すべて本質上同じであって、貨幣はこれらの一般的法則を支配するものではけっしてなく、いつもこれに従うものであるということを知ったのであった。(Mill [1848] 1965, III: 595, 訳(3): 278-27, 強調引用者)

J. S. ミルは、国際価値論において生産費説から需要供給説へと転回したため、国際価値を生産費にもとづいて説明することができず、価値と費用の二分法を採用せざるを得なかった。

ある国が外国貿易によって商品をより安く取得するには、価値の意味と費用の意味の2つの意味がある。「価値 Value」の意味と「費用 Cost」の意味がそれである。……安さの度合いは、この語義 [Value] においては……「国際需要均等」の法則に依存している。……しかし他方の意味 [Cost] においては、ある国は同量の労働および資本の支出をもってより多くの商品を取得するときに、ある商品をより安く入手するわけである。……したがって、これから、各国はその労働の一般的効率に比例して、その輸入品をより小さい費用をもって取得するという結論が出てくる。(Mill [1848] 1965, III: 615-616, 訳(3): 317)

J. S. ミルにとって、外国貿易において、ある商品を生産する労働の効率が上がるということはその商品を手に入れるための費用が下がるということにすぎず、商品の価値はあくまで「国際需要均等」の法則によって決定される。J. S. ミルは、価値と費用の二分法を貨幣の分析にも適用する。

貨幣、あるいは貨幣がつくられている材料は、イングランドでも、他の多くの国々でも、外国産の商品である。したがって、その価値と分配は、近接したもろもろの土地のあいだで

結論をもたらす原理」(Mill [1848] 1965, III: 636, 訳(3): 355)として、次のリカードウの一文を引用している。「金と銀が流通の一般的な媒介物として選ばれてきているので、それらのものは、商業上の競争によって、もしもこのような金属が存在せず、諸国間の貿易が物々貿易であるならば起ころであろうところの、自然の通商に適応するような割合で、世界の異なった国々のあいだに分配されるのである」(*Works* I: 137)。これはJ. S. ミルが『経済学原理』においてリカードウから引用した2箇所のうちの1つである（この事実は小沢佳史氏に教示された）。

行われる価値法則 [生産費の法則] ではなく、輸入諸商品に適用される価値法則、つまり「国際的価値」の法則によって規制されるはずである。(Mill [1848] 1965, III : 618, 訳 (3) : 322)

外国においてもっとも多く需要されており、かつ最小の容積の中に最大の価値を貯えているところこの輸出用生産物を持ち、鉱山にもっとも近く、かつ外国の生産物にたいする需要がもっとも少ない国々、このような国々が、貨幣がもっとも低い価値をもつ国々、言い換えれば、物価がいつも最高となっている国々である。貨幣の価値についてでなく、その費用 (すなわち貨幣を稼得するために支出しなければならないその国の労働の量) について語る場合には、私たちは、このような低廉性の四つの条件に、なお「その国の生産的産業がもっとも効率が高い国々」という、第5の条件を加えなければならない。(Mill [1848] 1965, III : 620, 訳 (3) : 326, 強調引用者)

以上の議論にもとづいて、J. S. ミルは、貨幣の価値はもっぱら相互需要と需要の弾力性 (ミルの用語では「外需の拡張性」)、さらに部分的には輸送コストにも依存するという理由で、シーニアを批判する²¹⁾。

この命題をはじめて明確に認識し叙述したのは、シーニア氏 [Senior 1830] である。しかしシーニア氏はそれを貴金属の輸入にのみ妥当するとしていた。……イングランドの輸入品がイングランドにとって要するところのものは、イングランドがそれにたいして提供するところのイングランド自身の商品の数量、およびそれらの商品の費用という、2つの変数の関数である。(Mill [1848] 1965, III : 616, 訳 (3) : 319-320)

したがって、シーニア氏が、イングランドの労働の効率の大であることが、イングランドが他の多くの国々よりも小さい費用をもって貴金属を入手している、主な原因であると指摘したのは、正当であるけれども、それが、また貴金属の価値が低いことを、諸商品を購入する力が小さいことを説明すると言っているのは私としては承服することができない。これは、もしもそれが一個の事実であって、たんなる幻想でないとするならば、たしかにイングランドの主要諸商品にたいする需要が大きいこと……など他の諸商業国の輸出品となっているところのものと比べて、一般に容積が小さい性質のものであるということから生ずるはずである。これら二つの原因が、イングランドにおける一般物価の水準が、外国産諸商品にたいす

21) J. S. ミルはシーニア (およびリカードウ) が観察した事実自体を疑っていたようである。「イングランドにおいて商品価格が高く貨幣の購買力が低いということは、事実であるよりもむしろ外見のものであると私は強く信じている」(J. S. Mill [1848] 1965, III : 620, 訳 (3) : 327)。

るイングランド自身の大きな需要の反作用的影響があるにかかわらず、他の土地よりもやや高くなっているという事実を説明するであろう。(Mill [1848] 1965, III : 620, 訳 (3) : 326-327, 強調原文)

以上のように、J. S. ミルは、貨幣価値は「国際需要均等」の法則に依存するが、ある国の貨幣獲得費用（「それを得るために費やされなければならないその国の労働の量」）は、リカードウやシーニアとは反対に、その国の貨幣価値に影響しないと主張している。

しかしながら、相互需要説にもとづくミルの推論が無効であることは明らかである。たとえば、ある国の労働生産性が上昇すれば、その国の貨幣所得は上昇するが、相互需要に関連するとされる商品交易条件には影響を与えない。

表2の「4つの数字」を(81, 90, 120, 108)から(40.5, 45, 120, 108)に修正してみよう。シーニアの理論では、ポルトガルの貨幣所得が $45/81 = 0.555$ から $45/40.5 = 1.111$ に上昇すると予想されるが、商品交易条件 p_w/p_c がたとえ相互需要によって決定されるとしても、以前と同じ範囲 ($40.5/45 = 81/90 < p_w/p_c < 120/108$) に決まり、変化しないだろう。あるいは、リカードウの推論に従えば、ポルトガルのワインとクロスの自然価格が安くなり、その結果イングランドは金を輸出しなければならなくなり、貨幣所得が減少し、一方、ポルトガルの貨幣所得は金の流入によって増加する。いずれにせよ、商品交易条件は変化しないまま、貿易を行なう国々の貨幣所得は要素交易条件の変化にしたがって増減することがありうるのである。

2. 貨幣価値と貨幣所得との関係にかんするタウシッグの折衷論

F. W. タウシッグ (Frank William Taussig, 1859-1940) は、各国の労働生産性と貨幣所得の関係を分析した²²⁾。タウシッグは分析の末尾に、リカードウと、とりわけシーニアの貢献を高く評価する脚注を付した。

このような議論全体の土台を築いたのはリカードウであり、とりわけ外国貿易論において彼の天才的な才能はもっとも発揮された。しかし、私が知るかぎりリカードウが言及したのは、異なる国々のあいだで変動する一般物価についてのみである。貨幣所得の範囲が外国貿易の諸条件に依存することを明確に示したのはシーニアである (*Lectures on the Cost of Obtaining Money*, 1830, pp.13-16)。(Taussig 1920 : 84)

しかし、これに続く部分でタウシッグの評価の軸は揺れ動いているように見える。J. S. ミル

22) タウシッグの有名な論文 “Wages and Prices in Relation to International Trade” はもともと *Quarterly Journal of Economics*, 20 (4), 1906に掲載され Taussig (1920) に第4章として再録された。本稿では後者を参照している。

にかんしてはあいまいな判断を述べ、ケアンズとバスタブルには短く言及するのみであり、エッジワースにまで予期せぬ言及²³⁾を行っている。

J. S. ミルは、外国貿易の有利な条件の結果として、高価格がもたらされると論じたり高所得がもたらされると論じたりしたが、その説明のなかで、貨幣所得と国内物価の関係を立ち入って考察することはなかった。ケアンズは、表現は異なるもののシーニアを継承して、ある国にとって「低廉な金」をもつことは有利であると述べた。彼は詳しく論じなかったが、「低廉な貨幣」という言葉を、高い貨幣所得、すなわち少ない労働で多くの金を得るという意味で用いた。ケアンズはまた、「低廉な金」が必ずしも国内商品の高価格を意味するわけではないことを指摘した。*Leading Principles*, Part IIIを参照せよ。バスタブルの『国際貿易論』第4版71ページには、この有能な思想家が貨幣所得と物価の複雑な関係について考察していたことを示す短い段落がある。『エコノミック・ジャーナル』第4巻に掲載されたエッジワース教授の国際貿易にかんする論文は、貿易理論のまったく異なる側面を取り上げている。フランスやドイツの経済学者たちの著作には、このようなテーマに彼らの関心をもつことを示すものはまったく見当たらない。(Taussig 1920 : 84-85)

これはどういうことだろうか？ タウシッグの問題設定は、一見したところ、シーニアの問題設定を受け継いでいるように見える。しかし同時に、タウシッグはJ. S. ミルの相互需要説と価値と費用の二分法にたいしても肯定的に言及し、J. S. ミルの議論に従って、相互需要にもとづく有利な交易条件が高い貨幣所得をもたらすとも主張している。

次の問いは、高い貨幣賃金の原因は何かということである。手短かに答えるとすれば、輸出商品の生産効率がよく、またその輸出商品が世界市場において良好な価格で売れる国々の貨幣賃金は高いということである。貨幣所得の一般的な範囲は、根本的に国際貿易の条件のみに依存する。国内物価は、国内商品への労働投入が小さければ高く、国内商品への労働投入が大きければ低い。(Taussig 1920 : 81-82)

輸出品の価格は、その商品にたいする世界の需要に左右される。世界需要、より注意深く言えば需要の相互作用において、いくつかの国々の消費者が自国に輸入される商品にどの程度関心をもつか、どの国が輸出品を有利な条件で販売できるかを決定する。輸出品にたいして強い需要がある国々は、高い貨幣所得を実現する可能性がきわめて高い。その可能性が

23) タウシッグがここで言及している Edgeworth (1894abc) は、マーシャルがJ. S. ミルの相互需要説をもとに考案したオファー曲線に、価値論の基盤を与えたものとして知られている。この点については別稿で論じる。

実現し、実際に高い貨幣所得を得られるかどうかは、輸出品の労働費用に依存する。(Taussig 1920 : 82)

タウシッグと同時代人である J. エンジェルは、タウシッグの議論の折衷的性格を次のように的確に指摘している。「このように、タウシッグは、シーニアと J. S. ミルに倣って、貨幣所得の範囲が、第一に国際需要の条件に依存するとし、第二に労働の相対的効率性に依存するとした」(Angell [1926] 1965 : 105)。

3. カッセルの購買力平価説と「バラッサ=サミュエルソン仮説」

最後に、G. カッセルについて触れておこう。今日、リカードウが行った「異なる国々における貨幣価値の差異」にかんする議論は、国際的な物価水準格差を労働生産性上昇率の差に帰する、いわゆる「バラッサ=サミュエルソン仮説」(Officer 1982ならびに Rogoff 1996を参照)の源流とみなされている。これらの議論は、もっぱら貨幣数量説に依拠したカッセルの購買力平価説 (Cassel 1921, 1922) のレンズを通して行われる。そこでは、リカードウの洞察は簡単に触れられるだけであり、シーニアは忘却の彼方に消え去っている。

V. むすびにかえて

本稿では次の点を明らかにした。

1) 近年におけるリカードウ貿易論研究の急進展で得られた知見にもとづいて、リカードウ理論の特質を「事後的アプローチ」による生産費価値説 (自然価格論) の展開であると捉えれば、リカードウは要素交易条件を重視して「異なる国々における貨幣価値の相違」を分析していたことが明らかになる。

2) シーニアは、リカードウの生産費価値説ばかりでなく要素交易条件の変化に着目した「世界各国における貨幣の比較価値」の分析をも継承したと言える。シーニアにとっては世界市場における競争を通じて輸出産業の労働生産性 (貨幣稼得能力) が向上し高い貨幣所得を獲得することが重要であった。

3) リカードウおよびシーニアとは反対に、J. S. ミルは「すべての貿易は実際には物々交換であり」貨幣もまた輸入商品であるとして、相互需要説を貨幣の分析にも適用した。J. S. ミルは、価値と費用の二分法にもとづき、労働生産性の変化は貨幣の取得費用に影響を及ぼすだけで、貨幣の価値には影響を及ぼさないと誤って結論づけた。

リカードウからシーニアへと継承された生産費にもとづく国際価値論と貨幣稼得費用を重視する貨幣論の流れは、J. S. ミルによる需要供給価値説への転回によって断ち切られ、1920年代にはタウシッグの折衷論によってその意義が曖昧にされた。他方、リカードウにはじまる「異

なる国々における貨幣価値の差異」という問題は、カッセルの購買力平価説に収斂され、シーニアの重要な貢献は忘却されることになった。

ハーバラーらによって新古典派貿易論が誕生する1930年代を迎える前夜の貿易論の状況は、以上のようなものであった。

参考文献

- Angell, James W. ([1926] 1965) *The Theory of International Prices: History, Criticism and Restatement*, New York: Augustus M. Kelly.
- Bowley, Marian (1937) *Nassau Senior and Classical Economics*, London: George Allen & Unwin Ltd.
- Cassel, Gustav (1921) *The World's Money Problems*, New York: E.P. Dutton and Co.
- Cassel, Gustav (1922) *Money and Foreign Exchange after 1914*, New York: MacMillan.
- Edgeworth, Francis Ysdro (1894abc) Theory of International Values, Part I - III, *The Economic Journal*, 4 (13) : 35-50; 4 (15) : 424-443; 4 (16) : 606-638.
- Faccarello, Gilbert ([2015] 2017) A Calm Investigation into Mr Ricardo's Principles of International Trade, *The European Journal of the History of Economic Thought*, 22 (5) : 754-790. Also published as Chapter 6 in Senga *et al.* eds. (2017).
- Faccarello, Gilbert (2022) "I profess to have made no discovery". James Mill on Comparative Advantage, *The European Journal of the History of Economic Thought*, 29 (1) , 61-81.
- Gehrke, Christian (2023) George Grote's Manuscript Essay on "Foreign Trade," Paper prepared for 26th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought in Liège, Belgium, 1 - 3 June 2023.
- Haberler, Gottfried ([1930] 1985) Die Theorie der Komparativen Kosten und Ihre Auswertung für die Begründung des Freihandels, *Weltwirtschaftliches Archiv* 32: 349-370 [English translation entitled 'The Theory of Comparative Advantage and Its Use in the Defence of Free Trade,' in *Selected Essays of Gottfried Haberler*, edited by A. Y. C. Koo, Cambridge, MA: The MIT Press: 3-19].
- Maneschi, Andrea (2004) The True Meaning of Ricardo's Four Magic Numbers, *Journal of International Economics*, 62: 433-443.
- Maneschi, Andrea (2008) How Would David Ricardo Have Taught the Principle of Comparative Advantage? *Southern Economic Journal*, 74 (4) : 1167-1176.
- Martyn, Henry (1701) *Considerations upon the East India Trade*, reprinted in McCulloch ed. (1856). Reissued in the title of *The Advantages of The East-India Trade to England*, 1720.
- Mill, John Stuart ([1844] 1967) *Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy*, London: John W. Parker, reprinted in *Collected Works of John Stuart Mill*, Vol. 4. Toronto: Toronto University Press. (J. S. ミル著／杉原四郎・山下重一編『J. S. ミル初期著作集4』御茶の水書房, 1997年)。
- Mill, John Stuart ([1848-71] 1965) *Principles of Political Economy*, London: John W. Parker, reprinted in *Collected Works of John Stuart Mill*, Vols. 2-3. Toronto: Toronto University Press. (J・S・ミル著／末永茂喜訳『経済学原理(1)～(5)』岩波文庫, 1959-1963年)。
- Officer, Lawrence H. (1982) *Purchasing Power Parity and Exchange Rates: Theory, Evidence and Relevance*, Greenwich, CT: JAI Press.
- Parrinello, Sergio (1988) 'On Foreign Trade' and the Ricardian Model of Trade, *Journal of Post-*

- Keynesian Economics*, 10 (4) : 585-601.
- Ricardo, David (1951-1973) *The Works and Correspondence of David Ricardo*, 11 vols., edited by Piero Sraffa with the collaboration of M. H. Dobb. Cambridge: Cambridge University Press.
- Robbins, Lionel (1958) *Robert Torrens and the Evolution of Classical Economics*, London: Macmillan.
- Rogoff, Kenneth (1996) The Purchasing Power Parity Puzzle. *Journal of Economic Literature*, 34 (2) : 647-668.
- Ruffin, Roy (2002) David Ricardo's Discovery of Comparative Advantage, *History of Political Economy*, 34 (4) : 727-748.
- Samuelson, P. A. 1969. The Way of an Economist, in P. A. Samuelson ed., *International Economic Relations*, London: Macmillan, 1-11. (山根太郎訳「経済学者の道」塩野谷祐一ほか訳『サミュエルソン経済学体系第9巻 リカードウ, マルクス, ケインズ……』勁草書房, 1979年)。
- Schumpeter, Joseph A. (1954) *History of Economic Analysis*. London: Allen & Urwin. (東畑精一訳『経済分析の歴史 上・中・下』岩波書店, 2005-06年)。
- Senga, Shigeyoshi, Masatomi Fujimoto and Taichi Tabuchi eds. (2017) *Ricardo and International Trade*, London: Routledge.
- Senior, Nassau W. ([1830] 1998) *Three Lectures on the Cost of Obtaining Money*. Reprinted in Vol. 2 of *Collected Works of Nassau William Senior*, Tokyo: Kyokuto Shoten.
- Senior, Nassau W. ([1831] 1998) *Three Lectures on the Rate of Wages*. Reprinted in Vol. 5 of *Collected Works of Nassau William Senior*, Tokyo: Kyokuto Shoten.
- Senior, Nassau W. ([1843] 1998) *Free Trade and Retaliation*. Reprinted in Vol. 5 of *Collected Works of Nassau William Senior*, Tokyo: Kyokuto Shoten.
- Shiozawa, Yoshinori (2017a) The New Theory of International Values: An Overview, in Shiozawa *et al.* eds. (2017).
- Shiozawa, Yoshinori (2017b) An Origin of the Neoclassical Revolution: Mill's 'Reversion' and its Consequences, in Shiozawa *et al.* eds. (2017).
- Shiozawa, Yoshinori, Toshihiro Oka and Taichi Tabuchi eds. (2017) *A New Construction of Ricardian Theory of International Values: Analytical and Historical Approach*, Singapore: Springer.
- Sraffa, Piero (1930) An Alleged Correction of Ricardo, *Quarterly Journal of Economics*, 44: 539-545.
- Tabuchi, Taichi (2017a) Comparative Advantage in the Light of the *Old Value Theories*, in Shiozawa *et al.* eds. (2017) : 265-280.
- Tabuchi, Taichi (2017b) Yukizawa's Interpretation of Ricardo's 'Theory of Comparative Costs', in Senga *et al.* eds. (2017) : 48-59.
- Tabuchi, Taichi (2018) Ricardo's Theory of Value and International Trade: On the Invalidity of the Alleged 'Labour Theory of Value'. *The History of Economic Thought* (The Japanese Society for the History of Economic Thought), 60 (1), 79-99.
- Tabuchi, Taichi (2023) Ricardo, Senior and Stirling on Money and International Values, Paper prepared for 26th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought in Lie`ge, Belgium, 1 - 3 June 2023.
- Tabuchi, Taichi and Taro Hisamatsu (2022) International Trade. *Routledge Historical Resources History of Economic Thought*, <http://dx.doi.org/10.4324/9781138201521-HET24-1>.
- Taussig, Frank W. (1920) *Free Trade, the Tariff and Reciprocity*, New York: Macmillan.
- Viner, Jacob ([1937] 1955) *Studies in the Theory of International Trade*. Reprinted in 1955. London: George Allen & Unwin.

- 小島清 (1952) 『国際経済理論の研究』 東洋経済新報社。
- 塩沢由典 (2014) 『リカード貿易問題の最終解決—国際価値論の復権』 岩波書店。
- 竹永進・田淵太一・若松直幸 (2023) 「研究動向・2000年代以降の国内外のリカードウ研究」『経済学史研究』 64 (2) : 45-67。
- 田淵太一 (2006) 『貿易・貨幣・権力—国際経済学批判』 法政大学出版局。
- 田淵太一 (2020) 「国際価値をめぐるシーニア・トレンズ論争の意義—Catalactics への転換」『同志社商学』 71 (5) : 129-144。
- 田淵太一 (2022a) 「N. シーニアの貨幣論と国際価値論」『高崎経済大学論集』 64 (2) : 45-57。
- 田淵太一 (2022b) 「『4つの数字』の魔力—リカード貿易理論の新展開」『同志社商学』 74 (2) : 85-113。
- 田淵太一・久松太郎 (2018) 「リカードはリカード・モデルを提示したのか」『国際経済』 69 (日本国際経済学会研究年報「比較優位論の現代的意義：『経済学および課税の原理』出版200年記念) : 1-30。
- 名和統一 (1949) 『国際価値論研究』 日本評論社。
- 久松太郎 (2016a) 「デイヴィッド・リカードウと『比較優位の原理』—先駆者とその後の展開」『国民経済学雑誌』 214 (4) : 81-99。
- 久松太郎 (2016b) 「ロバート・トレンズと比較優位の原理」『国民経済雑誌』 214 (5) : 51-70。
- 行沢健三 (1974) 「リカードウ『比較生産費説』の原型理解と変型理解」『商学論纂』 (中央大学) 15 (6) : 25-51。
- 行沢健三 (1978) 「古典派貿易理論の形成—リカードウとミル父子」行沢健三・田中真晴・平井俊彦・山口和男編, 出口勇蔵古希記念論文集『社会科学の方法と歴史』 ミネルヴァ書房, 203-24。
- 吉信肅 (1991) 『古典派貿易理論の展開』 同文館。